
金の姫と黒の王子

紫華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金の姫と黒の王子

【Nコード】

N7933K

【作者名】

紫華

【あらすじ】

ハリー・ポッターの親世代のお話です。

捏造設定がかなりあります。

そんなのイヤ！！と言う方は読まないほうがいいと思います。

オリジナルキャラとシリウスとの恋愛(?)になる予定です。

そしてルシウスの扱い酷いです。
ルシウスファンの人は注意してください m (_) m

プロローグ（前書き）

初投稿になります。

文章力がないので、会話主体になってしまうかも……（＜|＞）

プロローグ

月に照らされた、素晴らしい庭園。
しかし、整いすぎたそれには暖かみがない。
そこを歩く一人の少女。

月に照らされた、豪華な屋敷のベランダ。
そこにたたずむ一人の少年。

少女は思う。

あの月のようになりたい、と。

月はすべてのものを優しく包みこむことができるから。

少年は思う。

あの月のようにはなりたくない、と。
自ら輝けない存在になることは嫌だから。

少女と少年、二人が出会う時。
運命は音をたてて回りはじめた。

二人の運命が交錯する時。
新たな物語が幕をあげた。

プロローグ（後書き）

一応プロローグ（？）です。

あらすじからわかる人はわかると思いますが、少女と少年は……。

入学前夜

コンコン。

部屋の戸がノックされた。

「ルウ様。奥方さまがお呼びでございます。」

扉を見れば、家に仕えている屋敷僕妖精が顔をだしている。

ルウと呼ばれた少女は小さくため息を吐いた。

「今行くわ。お母様はどちらに？」

ルウが尋ねると、こちらでございまして屋敷僕妖精が言い、ルウを連れて行った。

果てしなく続くように思える廊下と部屋の扉。

そのひとつの扉の前で屋敷僕妖精は足を止めた。

「奥方さまはこちらにいらっしゃいます。」

ルウはその扉を叩いた。

「お母様、失礼いたします。どうかおなさいましたか？」

ルウが部屋に入ると満面の笑みを浮かべた母がいた。

「ルウ。貴女も明日からホグワーツの一員ね。我が一族の誇りを失わずに——」

ルウは途中で聞くのをやめた。どうせ母お得意の一族自慢だ。

貴女のお祖父様は……

貴女の伯父様は……
貴女の5代前の当主は……

もう耳にタコができるくらい聞いた。

暗唱しろと言われたらできるんじゃないかとルウは密かに思っている。

3時間（！）にも渡る母の話がやっと終わった。

「ルウ。貴女は偉大なるホグワーツの創始者ゴドリック・グリフィンドール、ヘルガ・ハッフルパフ、ロヴェエナ・レイブンクロー、サラザール・スリザリンの全ての血を引いているのですよ。」
母の言葉はそう締めくくられた。

「わかっています、お母様。シルヴィス家にふさわしく振る舞いますわ。」

ルウはそう言い、見事なお辞儀を試みせた。
心の中では舌を出しながら。

退出し、自室に戻ったルウはベッドに倒れこんだ。

「明日からホグワーツ、か……。いったいどうなるのかしらね……」

…。
」

期待に胸を膨らませ、ルウは眠りについた。

入学前夜（後書き）

オリキャラのヒロイン、ルウの登場です。
容姿の説明などは、また後の話で……………。

ホグワーツ特急

9と4分の3番線は人でいっぱいだった。

見送りはいらない、とルウが突っぱねたためルウの見送りはいない。

「んー、空いてるコンパートメントあるかな……?」

駅に着いた時間が少し遅かったため、既にコンパートメントはいっぱいだ。

「……………空いてない。」

ルウがそう呟いた時だった。

目の前に赤毛に緑の瞳の可愛い少女が現れた。

「貴女まだ荷物置いてないの？私のコンパートメントにいらっしやいよ。」

ルウは即座に頷いた。

「ここよ。……………まだ自己紹介してなかったわね。私はリリー。リリー・エバンズよ。リリーでいいわ。よろしくね。」

そう言ってリリーはルウに手を差しだした。

ルウはその手を取り、握手をした。

そこで、リリーのコンパートメントにもう一人いることに気づいた。

ルウがじーつと見つめるとその少年は居心地が悪そうに身じろぎした。

「……………俺は、セブルス・スネイプだ。」

それだけを言うと、少年は読んでいた本に視線を戻した。

「ごめんなさい、セブは愛想が悪いの。ところで、貴女の名前は？」
セブルスの代わりにリリーが謝る。

「あ、ごめんね。私も自己紹介してなかったね。私はルウよ。ルウ・ユーファティア・セレナ・シルヴィス。よろしくね。」とくん。

ルウの自己紹介を聞いてセブルスが読んでいた本を落とした。

ルウが題名を見てみると『愛しのあの子のハートをゲット』と書いてある。

……………似合わない。

会ったばかりだがわかる。

似合っていない。

しかしリリーはそんなことは気にせずにセブルスに問いかける。

「セブ？どうしたの？」

「……………シルヴィス？あの？純血の王族と呼ばれている？」

“純血の王族”

そう言われてルウはかすかに顔をしかめた。

「その呼び名は好きじゃないの。やめてくれる？」

ルウがちよつとイライラしながら言うと、ホグワーツ特急の窓ガラスが割れた。

ガシャンッ。

あーあ、またやっちゃったとルウが呟く。

「ルウ？セブがまた何か気に障ることを言ったのね。よかったら何

故か教えてくれないかしら？」

リリーがおずおずと尋ねた。

無理もないだろう。

リリーは怒って魔力が暴走する人に会ったことがなかったのだ。

リリー自身も幼なじみのセブルスも滅多に魔力を暴走させることはなかった。

それは、魔力が暴走するほど多くはなかったからなのだが。

「あー、うん……。今はまだ無理、かな。……………もうすぐホグワーツに着くから。またあとでね。」

そう言っているとルウはコンパートメントを出て行った。

余談だが、その後セブルスはリリーにこっぴどく叱られたそうだ。

金の姫が黒の王子に出会うまであとちょっと。

ホグワーツ特急（後書き）

ルウがリリーとセブルスに出会いました。
純血の王族。

ルウはそう呼ばれるのが嫌いなようです。

……………シリウスが出て来ない（涙）

再会

リリーとセブルスに悪いことしたなとルウは反省した。

自分が純血の王族と呼ばれるのが嫌いなことは知らなかったわけだし、それで怒る自分が悪い。

「…………… やっちゃった。後で謝る。」

「誰にだい？」

「?!」

ルウのすぐ後ろで声がした。

振り向くと、くしゃくしゃの黒髪の少年がいた。

「はじめまして。僕はジェームズだ。ジェームズ・ポッター。よろしく。」

少年、ジェームズはにこつと笑った。

「私は——」

ルウが自己紹介しようとした時だった。

「ジェームズ!! まったく、ひとりで先に行くんじゃないよ。俺もリーマスもピーターも置いてきやがって。」

ひとりの少年が現れた。

黒髪に灰色の瞳をした少年だ。

とても整った顔立ちだ。

かっこいいという言葉では表現しきれない。

「シリウ、ス……………？」

ルウは呟いた。

信じられないとでも言うように。

「ルウ……？」

シリウスも呟いた。

まさか、とでも言うように。

金の姫と黒の王子が再会した。
もう戻れない。

物語は幕をあげたのだから。

再会（後書き）

ごめんなさい、短いです……。きりのいいところで切ろうとしたらこんなに短くなってしまいましたΣ（。Д。）ノ

やっと、ルウとシリウスが出会いました。でも……タイトルは『再会』。ついでにルウとシリウスはお互いを知っているようです。しかもファーストネーム呼んじゃってます。

あああああああ！！！！

自分の文章力の無さが恨めしい………情景描写とか苦手なんです。

なるべくちゃっちゃと更新するつもりなので、これからよろしくお願いします（*^ ^*）感想もいただけたら嬉しいです。

幼なじみ

「はれ？シリウスこの子と知り合い？」
「はれ？って……。」

せめてあれ？と言いなさい、ジェームズくん。
間抜けな声を出すジェームズ。

と、リーマスとピーターもやっと思いついた。

「はあはあ……。ジェ、ジェームズも、シリ、ウスも……。走る、
の速い、よ……。」

肩で息をしながら言うピーターにリーマスが笑いかける。

「ピーター。まだまだだね。僕は走るのそんなに速くはないけど、
そんなにぜえぜえしてないよ？修行が足りないね。」

にっこりと黒い笑いをプレゼント。
ピーターはびくびくしている。

「おい、シリウス……？」ジェームズが呼びかける。
ちなみにこれで9回目。

やっとしリウスは我にかえったようだ。

そしてルウも。

「ああ、悪い。知り合いつていうか、幼なじみ？になるのか……？」
シリウスは首を傾げながら言う。

「それでいいんじゃない？昔はよく遊んだわよね。私とシリウスと
兄様たちとレギュラスで。」
ルウが補足する。

そう、それは3年前までは日常だった。

ルウ、シリウス、ルウの兄たち、レギュラスで遊ぶのは。
それが変わったのはルウの8歳の誕生日の日。

ルウは両親に呼び出された。

「お父様、お母様？」

首を傾げるルウ。

せっかくシリウスたちと遊んでいたのに。

次は私が鬼だったのよ。

ルウは心の中で文句を言う。

「ルウ。お前は今日で何歳になる？」

父がルウに尋ねた。

お父様ボケたのかしら。

さりげなく失礼なことを思いながらルウは答える。

「今日で8歳になります。それがなにか？」

最後の一言を聞いて父は少し機嫌を悪くしたようだ。

「そうだ、8歳だ。そして、お前には婚約者ができた。マルフォイ家のルシウスくんだ。というわけで、もうブラック家の息子と遊んではならん。」

「え……………」

父の言葉はルウが全く予想していなかったものであった。

コンヤクシャ……………？

誰の？

私の。

遊んじゃだめ？

誰と？

シリウスやレギュラスと。

「お父様、いやー！だって私知らないもの。ルシウスって人のこと……。」

ルウはいいやと幼子のように何度も首を振った。

しかし、父が聞き入れてくれるはずもなく、その日からシリウスとは会えなくなった……。

「3年ぶりね、シリウス。レギュラスは元気？シッシヤベラは？」

昔よく遊んだ友達。

その今をシリウスに尋ねた。

「元気さ。ああ、レギュラスとナルシッサはそうでもないかな……。俺だけ今年ホグワーツに行くのはズルイって泣かれたよ。」

シリウスは苦笑する。

と、そこでジェームズがわざとらしく咳をした。

「あー、シリウスくん？君とそちらのお嬢さんは知り合いみたいだが僕たちはそうじゃないんだが？」

「悪い。ルウ、俺はご存知のとおりブラック家の長男、シリウス・ブラックだ。で、こっちの髪の毛くるくる眼鏡がジェームズ・ポッター。このエセ紳士がリーマス・ルーピン。最後にこの小さいのがピーター・ペティグリュー。」

シリウスが簡潔に紹介する。

ここで、ジェームズとリーマスから反論が。

「シリウス！！ひどいじゃないか！！どうして僕が髪の毛くるくる

眼鏡なんだい?!」

ジェームズが大げさに嘆いてみせる。

「僕のどこがエセ紳士なのかな?」

穏やかに、それでいて威圧的に問い(?)かけるリーマス。
が、シリウスは怯まない。

「本当のことだろ?」

と、ケラケラ笑っている。

ルウもそれを見て笑った。

「ポッターにルーピン、ペティグリューね。よろしく。私はルウ。
ルウ・ユーフアティア・セレナ・シルヴィスよ。」

「シルヴィス?!あの純け……もがっ」

ジェームズが言おうとすると、すかさずシリウスがその口を塞いだ。

「なにするんだい?!」

またジェームズがわーわーと騒ぎだした。

シリウスを見てルウは嬉しくなった。

シリウスは憶えていてくれた。

私が“純血の王族”と呼ばれるのが嫌いなことを。

「ごめんなさい、ポッター。私、そう呼ばれるの大っ嫌いなもの。」

そう言っつてルウはにこつと笑った。

その顔はまるで天使の皮を被った悪魔のようだった、と後にジェームズは語った。

幼なじみ（後書き）

ルウとシリウスは幼なじみだったんです。

ちなみにこの時点ではレギュラス、ナルシッサ、ベラトリックスはまだいい子です。

ルシウスはどうでもいい（笑）

あと、シリウスたちの年齢差がいまいちよくわからないので、勝手に決めちゃいます（汗）

レギュラス、ナルシッサはルウやシリウスより1歳年下。

ベラトリックス、ルシウスはルウやシリウスより2歳年上。

まだわかりませんが、ルシウスの扱い酷くなるかも………？

組分け

湖を舟で渡り、ホグワーツ城に着いた後。

「ああ、シルヴィス、僕たちをファーストネームで呼んでよ。ポッター、なんてよそよそしいじゃないか。」

ジェームズが突然言い出した。

ルウは驚いたが、ありがとうと笑った。

「わかったわ、ジェームズ、リーマス、ピーター。私のこともルウって呼んで。」

しばらくすると、厳格そうな魔女が現れた。

「私は、ミネルバ・マクゴナガルです。皆さんはこれから、ホグワーツで過ごす寮を決める組分けの儀式に参加することになります。」

そこでマクゴナガルは一度話をきり、周りをぐるっと見渡した。

シリウスの開いている第2ボタンに目をやってから視線を戻した。

「このホグワーツでは、寮があなた方の家となります。寮生は家族です。あなた方の良い行いは寮の得点となり、悪い行いは寮の減点となります。各々行動には気をつけるように。では参りましょう。」

組分けは順調に進んでいった。

名前を呼ばれる順は名前順というわけでもないらしい。

「シリウス・ブラック。」

シリウスの名前が呼ばれた。

スリザリン生が歓声をあげる。

ブラック家は今まで全員がスリザリンなのだ。

当然シリウスもスリザリンだろうというわけだ。

しかし、組分け帽子の叫んだ寮は。

「グリフィンドール！」

大広間が静まりかえった。

しかし、すぐにざわざわしだした。

「グリフィンドールだって？ブラック家の人間が？」

「嘘だろう、まさか……………」

その中で歓声をあげたのはグリフィンドール生。

ブラック家は優秀で有名である。

今まではスリザリンに全部持っていかれていたのだ。

そのブラック家の人間がグリフィンドールに。

グリフィンドール生にとってはかなり嬉しいことである。

反対に、シリウスを睨みつけるのはスリザリン生だ。

裏切られた気がした。

よりによって、スリザリンが一番敵対しているグリフィンドールである。

スリザリンに入るのが当たり前だと思っていたら、思わぬところに持っていかれた。

「静かにしなさい！」

マクゴナガルが言うと、やっと静まった。

それからしばらくは静かに進んだ。

セブルスはスリザリン、リリー、ジェームズ、リーマス、ピーターはシリウスと同じグリフィンドールだ。

「ルウ・シルヴィス。」

またもや大広間が騒然としだした。

あの“純血の王族”だ。

どの寮も自分達の寮に入ってほしいと願った。

これは秘密だが、寮監の先生も祈っていたらしい。

《ふむ。君はどの寮に入っても上手くやっていけるだろう。》
組分け帽子が言った。

《私は、どの寮でもいい。ただ……。》

《ただ、何かね？》

《親に決められた人生を進むのは嫌。周りから“純血の王族”だから、とおもわれるのも。》

ルウが組分け帽子に言う。
そう。

ルウは幼い頃から嫌だった。

“純血の王族”だから、シルヴィスだから、と思われるのが。
何をやっても出来て当たり前。

出来なければ、罰を与えられる。

実際はルウは優秀だったので、罰を与えられることはなかったが、兄や姉が罰を与えられるのを間近に見て育ってきた。

《そうか……。ならば――》

「グリフィンドー……ール!!」

グリフィンドールから歓声があがった。

こうしてルウはグリフィンドール生となり、7年の学校生活を送ることとなる。

金の姫と黒の王子は獅子寮に入り。
友と一緒に数々の伝説を残す。

組分け（後書き）

やっと序章が終わったって感じです。
これからも頑張りますね（。<ω>。）

直打ちなんで、思い立った時に書く！！となります。
そのため、更新は不定期になると思います（汗）

一目惚れ（前書き）

ちよつと小話……かな？

一目惚れ

「ルウ！！同じ寮ね！！これからもよろしくね。」

ルウがグリフィンドールの席に座るとリリーがやって来た。とても嬉しそうだ。

ルウの隣に座って、プディングをおいしそうに食べている。

そんなリリーを見て固まっている人がひとり。

「君！！名前はなんていうんだい？僕はジェームズさ。ジェームズ・ポッター。ジェームズって呼んでよ。」

「え、あーリリーよ。リリー・エバンズ。」

リリーがちよつと引きながら答える。

「リリー！！なんて君にぴったりな名前なんだ。《百合》だなんて！！可憐で可愛い君を見事に表している！！僕は君が好きだ！！付き合ってくれないかい？」

ルウとリリーは呆然としていた。

シリウス、リーマス、ピーターは大きくため息を吐いた。

「ジェームズ。お前唐突すぎだろ。普通はもつと段階を踏むもんだぞ。エバンズ、悪いな。こいつは猪突猛進すぎるんだ。」

「え、ええ。それはわかったけど……。ポッター。私、そうやって軽々しく告白する人は信用しないことにしてるの。」

リリーの一言でジェームズは撃沈。

それを見ていたグリフィンドール生にリリーは《吸魂鬼の姫》と不名誉なあだ名をつけられたらしい。

理由は、ジェームズの魂を吸い取ったかのように見えたからだとか……。

一目惚れ（後書き）

どうしても、このシーン入れたかったんです。

…… またもや短すぎですが（汗）

リリーにフラレるジェームズが書きたかった（笑）

これから、リリーの気を引くためのジェームズの猛アタックが始まるわけです。

なかなか報われないけど（；^ー^A

婚約者登場……？

ホグワーツに入学してから2ヶ月ほどたったある日。

ルウのもとに一人の男が現れた。

ルシウス・マルフォイ。

ルウの婚約者である。

ルシウスが現れたのは昼食のあと、ルウ達がいつものメンバーで遊んでいる時だった。

ちなみにいつものメンバーとは、ルウ、シリウス、ジェームズ、リマス、ピーター、リリーに途中から参加しだしたベラトリックスである。

「ルウ嬢。ご機嫌はいかがかな？」

そんな言葉とともにルシウスは現れた。

ルシウスの姿を見ると、ルウの機嫌は急降下。

「たった今まではよかったわよ、マルフォイ。」

低く地を這うような声にピーターはびくびくしている。

シリウスとリマス、ベラトリックスはルシウスが現れると同時に盛大な舌打ちをした。

湖のほとりの平和な木陰に一気に剣呑な空気が流れはじめた。

「ルシウス！何しにきたんだ？！とつとと帰りな。あたし達のルウに近づくんじゃないよ！！！」

ベラトリックスが大声で言う。

ここにいるルシウス以外の全員が知っているのだ。

ルウが親に決められた婚約者を毛嫌いしているということを。

ルシウスは、見た目はそんなに悪くない。

さらさらのストレートな銀髪は女ならば一度は憧れる。

（もちろんシリウスのほうが上だが。）

顔立ちも涼やかなもので、かなりの美形だ。

（もちろんシリウスのほうが上だが。）

成績だってかなり優秀だ。

（もちろんシリウスのほうが上だが。）

こんなわけで、ルシウスも結構モテるのだ。

（もちろんシリウスのほうが上だが。）

「酷いな、ベラトリックス。私はルウ嬢の婚約者だよ。ああ、その金の髪。そして赤の瞳。私の銀の髪と青の瞳と対になるように神がお創りになったに違いない！！私は初めて会った時からルウ嬢にどうしようもなく惹き付けられているのさ！！」

その場にいた全員を寒気が襲った。

（何あれ？！僕、すっごい寒気がするんだけど？！）

（ポッター。貴方もあれに似たことよく言っているわよ……………。）

（なんだって？！……………リリー、今度から気をつけるよ……………。）

（ぜひそうして頂戴……………。）

ジェームズが新たな事実がにつき、ひとつ成長しました。

と、ずっと黙っていたシリウスが口を開いた。

「ルシウス・マルフォイ。お前は間違っている。ルウの髪は金じゃ

ない。あれは王蜜色っていうんだ。それに瞳も赤じゃなくて紅だ。ついでにいうと、色彩から判断するならルウは太陽だ。んでお前は月。太陽と月は一見対等だが、実際は月は太陽の光で輝かせてもらっている。対等じゃない。というわけでルウとお前は対じゃない。おわかり？ルシウス・マルフォイ。」

ある意味告白より恥ずかしいんじゃないだろうか………？

ルウとシリウス以外の全員がそう思ったそうだ。

さすが、入学して早々『ホグワーツの色男』とあだ名をつけられただけある。

シリウスは天然のたらしなのだ。

「ありがとう、シリウス。そんなに褒めてくれて嬉しいわ。シリウスだってその黒檀みたいな漆黒の髪もどんなに精密に白と黒を混ぜてもつくることのできない綺麗な灰色の瞳も素晴らしいじゃない。」

「さんきゅ。」

この人達は次元が違う。

そして傍らから見ているとただのバカップルに見える。

またもやルウとシリウス以外の全員が思ったそうだ。

「私を忘れていないかい？」

一人取り残されたルシウスがぼつんと呟いた。

婚約者登場……？（後書き）

ルシウス登場！！

でも扱い酷い（笑）

ルシウスファンの人には申し訳ありませんが（汗）

だってルシウス嫌いなんだもん……

シリウス殺したからベラも嫌いだったんだけど、この話でならいい子にすることができるし♪♪

捏造設定です。

ルシウスの瞳は青で。

ていうかやつとルウの容姿でしたね（；^| ^A

王蜜色に紅の瞳の超美少女という設定です。

これからよろしく願いしますm（——）m

弱音（前書き）

シリウス弱ってます。

弱音

ルウは朝早くに目が覚めた。

まだ日が昇ってからそんなに時間がたっていない。

「んー……………」

だからと言って二度寝をするような気分でもない。

というわけで、談話室に下りていくことにした。

談話室には人影がひとつ。

「シリウス？」

ルウが名前を呼ぶと、シリウスは振り向いた。
泣きそうな顔で。

「どう…した…の？」

「ルウ……………」

ぎゅっ。

シリウスがルウに抱きついてきた。

いや、抱きつくというよりすがりついて……。

「あのな…………。メディから手紙が届いたんだ。」

メディというのは、アンドロメダ・ブラック、ベラトリックスの妹でナルシッサの姉、シリウスの従姉である。

「メディから…………？」

「レギュが、最近まいつてるって…………。俺がグリフィンドールに入ったからレギュが今まで以上に期待されて。ほとんど笑わないって。あんなによく笑うやつだったのに…………。」

そう言ったシリウスは、本当に泣いていた。

「俺のつせい……だっ！！自分のことし……か考……えてなかつ……
…たっ。俺の大嫌……なあ…の家に一人レギユが……い……る間、俺
…は皆と楽し……く過ご……し……てた。レギユ……が苦し……いことに……
も気づかな……で、遊んでたっ！！」

声を殺して泣くシリウス。

ルウはただシリウスを抱きしめ返すことしかできなかった。

初めて聞いたシリウスの弱音。

シリウスも完璧な人間じゃない。

私が支えてあげる。

気づかぬ内に芽生えはじめていた想い。

それに未だ気づかぬ金の姫はそつと目を閉じる。

怖いものなんかないと思っていた自分の弱さに気づいたある日。
自分の犠牲になってしまった弟のためにも。
もう迷わない。
ルウ、お前のおかげだ。

気づかぬ内に芽生えはじめていた想い。

未だ気づかぬ黒の王子は決意を新たにした。

弱音（後書き）

またまた捏造設定！！↑

アンドロメダは病弱なため、ホグワーツには行けず家庭教師に学んでいます。

シリウスたちと同じ年♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7933k/>

金の姫と黒の王子

2010年10月13日13時37分発行